

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第168号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成24年6月21日

ケイマフリ



2011. 6. 3 天売島

撮影者 大橋 晃 (札幌市東区)



も く じ

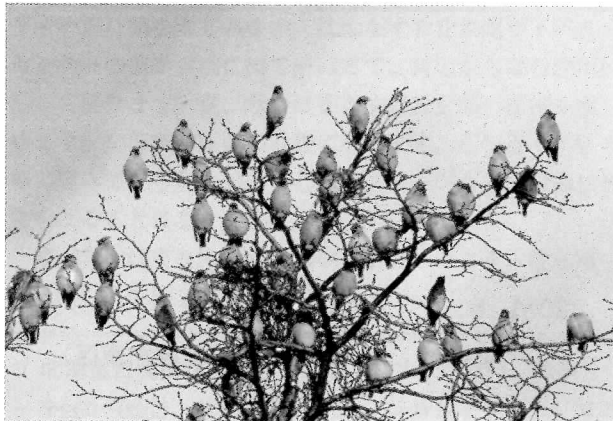
札幌市真駒内公園の冬鳥	札幌市南区 品川 睦生	2
サンカノゴイ 十勝管内初記録		
	帯広百年記念館学芸員 池田 亨嘉	4
長都沼でアネハヅルとサンカノゴイ	広 報 部	5
最果てのセキレイ 北海道希少生物調査会代表	寺島 淳一	6
【閑話】野鳥あれこれ TVや映画の中の双眼鏡画面		7
鳥類標識調査：標識される鳥の負担について		
	山階鳥類研究所保全研究室 仲村 昇	8
鳥達の奇妙な分布～北海道の鳥は北の鳥？～		
	京都府在住会員・日本鳥学会会員 梶田 学	9
平成24年度総会報告		10
探鳥会ほうこく		12
探鳥会あんない		16
鳥 民 だ よ り		16

札幌市真駒内公園の冬鳥

札幌市南区 品川 睦生

真駒内公園は1972年に開催された冬季札幌オリンピックの主会場として建設され、その後公園として整備されました。外周には約3kmの遊歩道があります。3年ほど前から冬場この外周遊歩道がスノーモービルで整備され、また、歩くスキーと歩く人の通路が雪面につくられ、歩きやすくなりました。駐車場は冬期間無料開放されています。ただし、春から秋の時期、土日祭日は有料になっていますのでご注意ください。昨年公園内の巨木には樹木名と推定年齢を書いたネームプレートが付いていますので見てください。巨木の数は少ないのですが、樹齢250～300年の木もあります。

今回は真駒内公園とその近辺のエドウィン・ダン記念公園、五輪団地のナナカマド並木、豊平川と真駒内川の合流地点などで見ることが出来る鳥のうち、主に冬鳥についてまとめてみました。



キレンジャクの群れ 2009. 1. 25

2009年秋まで

冬鳥ではないのですが1999年4月にはエドウィン・ダン記念公園でヤツガシラをビデオで撮影された人がいます（日本野鳥の会札幌支部報「カッコウ」1999年5月号に記載されています）。

2006年12月には公園内にギンザンマシコが飛来し、レンジャク類に混じってナナカマドの実を食べていました、その後は五輪団地のナナカマド並木でも見ることが出来ました。

2009年1月には公園内のカラ松の林にイスカ、マヒワ、ベニヒワなどが飛来し、5月初めまで見ることが出来ました。また真駒内川のサイクリングロードでトラツグミを写した人がいます。同年夏には豊平川さけ科学館側の横、豊平川沿いのポプラの木にチゴハヤブサが営巣して子育てし、3羽の幼鳥が無事巣立ちました。

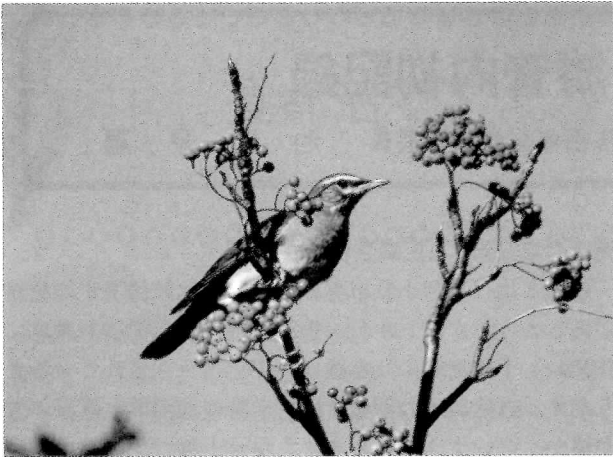
真駒内川と豊平川の合流点近くでは毎年オジロワシを確認できました。こんな場所に彼らの餌があると思えないのですが。

2009年11月～2010年3月

この冬は真駒内公園とその付近ではナナカマドの実がほとんど実らず、レンジャク類、ツグミなどを見ることが出来ませんでした。ちょっと寂しい冬でした。でも私の知人は五輪団地でベニバラウソを見ることが出来ました。

2010年11月～2011年3月

この冬はナナカマドの実は少ないながら実っていたので



マミチャジナイ 2010. 10. 31

すが、レンジャク類、ツグミなどがやってきて約1か月で無くなりました。でもマミチャジナイがナナカマドの実を食べているのを見ることが出来ました。その後は五輪団地付近のナナカマドに集まっています。2011年1月から3月末まで、公園内のイタヤカエデの古木にフクロウが居ました。このフクロウは公園内のアイドルとなり、散歩する人や歩くスキーをする人が入れ替わり見ていました。私は午前中しか見ないのですが、夕方まで写真を撮っている人の話では、フクロウが巣穴から出るとカラスに追いかけてられているそうです。また日中でもカラスがフクロウを威嚇していました。携帯電話で写真を撮ろうと木のそばに行く人がいて、ちょっと困りものです。サケの科学館近くの松林でカシラダカ、シロハラが越冬したそうです。

2011年11月～2012年3月

この冬はナナカマドの実が多く実りました。それまではほとんど実を付けなかった木にも実を付けていました。でも、ハルニレなどに付いているヤドリギの実は殆んどついていませんでした。

11月初めにツグミを初認しました、その後11月下旬にヒレンジャクを初認しました。その後マミチャジナイも見ることが出来ました。マミチャジナイはヒレンジャクと一緒



ツグミ(左)とハチジョウツグミ(右) 2010. 2. 19

にナナカマドの実を食べると近くの松の木に隠れるのですが、ほぼ定期的に現れました。その後ハチジョウツグミもこの公園内でも見ることが出来ました。でもキレンジャクは見ることが出来ませんでした。

ヒレンジャクとツグミはおよそ50羽程度と少ない群れでした。でも、同じナナカマドなどの実を食べるアトリが1羽も現れなかったためか、1月末まで見ることが出来ました。その後は五輪団地に現れました。その中にハチジョウツグミを2羽(胸の色が濃いのと薄いのが見られました)確認できました。サケの科学館側の松林ではカシラダカとシロハラを確認できました。この冬も越冬したようです。



カシラダカ 2012. 3. 8

他の何種かの鳥について

ヤマセミは毎年見られるのですが、5月末から11月は木々の葉が茂るため、なかなか見ることが出来ません。やはり冬の落葉した時期が一番いいようです。

2010年春のことですが、エドウィン・ダン記念公園で生まれたアカゲラの幼鳥に、この付近で子育てをしていたコムドリが餌を持ってきました。アカゲラの親鳥がそのコムドリを追いかけていました。このバトルが何日間も続きました。

この公園近くの曙中学校のハルニレで営巣しているオシドリについては、「真駒内芸術の森緑の回廊基金」が例年子育てを観察しており、11月ごろサケの科学館でビデオ放映しています。2011年も営巣し、無事巣から子供たちが出たそうです。2011年には曙中学校の校庭以外でも子育てをしたそうです。真駒内公園内の、太陽の広場の小さな池ではオシドリを見ることが出来たのですが、公園内を散歩する人がパンなどの餌を与えるので人になつてしまったため、2010年秋に「餌を与えないでください」という注意書きの看板が出ました。それからは餌を与える人が居なくなったので、オシドリは殆んど現れませんでした。冬場は公園内の公園橋下流で少数ですがマガモが越冬しています。

サンカノゴイ 十勝管内初記録

帯広百年記念館学芸員 池田亨嘉

2012年4月にサンカノゴイが画像とともに記録されたので報告します。十勝管内では初の記録と思われます。

観察日：2012年4月8日 天候 曇り

観察者：村井翼、大橋日向子

(両名とも帯広畜産大学のサークル自然探査会部員、
鳥類観察歴は3年程度)

場所：北海道十勝総合振興局管内中川郡豊頃町大津
大きさ：60cm以上70cm以下(飛び去ったあと鳥の近く
にあったヨシの草丈から推定)

観察状況：道路沿いのヨシの中におり擬態行動した後、
飛び立って湿地の中へ。その後捜索し、再び飛び立
つのを発見。見失う。

4月16日、観察者とともに現地を観察しました。
第一の観察場所は幅10m、長さ100m程のやや疎なヨシ
植生で、この日は明渠の浚渫土砂のため、植生幅の半分が
つぶれていました。土砂を被せただけのため、植生は再生
しそうです。周辺はヨシ原とハンノキの疎林に市街地
が接し、双方が入り組んだ環境でした。市街地から500m
ほど離れば大規模な植生がありますが、観察場所は規
模が小さすぎて、サンカノゴイの生息には適さないと
思われます。

サンカノゴイの道東の記録は多くはないようです。釧
路市立博物館鳥類標本目録(1990)では、阿寒町仁々志
別1965年4月4日、釧路市大楽毛1939年9月4日の標本
が記載されています。日本野鳥の会十勝支部・釧路支部
十勝と釧路の野鳥 十勝・釧路地方鳥類目録(1987)の記
録は、これに基づくものです。日本野鳥の会十勝支部 北
海道東部鳥類目録(2010)では十勝での記録は無く、前
述の記録以外では、浜中町霧多布での保護記録(1981年
8月)、別海町産の標本(年月日不明)が存在する(所在

場所は未記載)と記載されています。

道東と比べ、苫小牧市勇払周辺では比較的多くの記録
があるようです。しかし、勇払平野は都市環境と農地に
挟まれ、十勝海岸よりも強い人工化にさらされているよ
うです。自然環境の面積では南十勝の湖沼群と湿原の方
が遥かに広いように見えます。なぜ十勝の記録が少ない
のでしょうか。

- (1) 積雪・凍結の面で十勝は(越冬記録もある)勇払と
比べ、生息に不利な面があるのではないか。
- (2) 勇払は観察者と生息環境が同所的に存在するが、十
勝では離れている。また、環境の規模に対する観察者
や観察頻度が少ない。車による観察スタイルにも要因
がある(見逃しやすい?)。
- (3) 関連して十勝はヒグマの生息もあり夜間の観察適地
が少なく、車道と生息地の間に耕作地が多く存在し、
湿原植生へのアクセスがやや困難である…などと考え
ます。

うわさ話の域になってしまっていますが、10年以上前、一
般の方より「むかし湧洞沼にウシガエルがいたと聞いた
ことがありますか、本当ですか？」と質問されたことが
あります。その時は、深く考えずに「おそらくサンカノ
ゴイという鳥が生息していて、その鳴き声がウシガエル
と似ているので、そう思い込んだ方がいたのでしょう」
とお返事してしまいました。詳細を聞き取っておけば、
サンカノゴイの生息について更なるヒントが得られたか
もしれません。油断してはいけませんね。

大雪、知床、釧路湿原などの派手なところに目を奪わ
れがちですが、十勝海岸の湖沼地帯はそれらに劣らない
ほど、野生生物に関する発見が記録される可能性を秘めた、
魅力的な自然だと思えます。



写真1. サンカノゴイ擬態(撮影：村井 翼)



写真2. サンカノゴイ飛翔(撮影：村井 翼)

長都沼でアネハヅルとサンカノゴイ

広 報 部

アネハヅル

2012年3月30日の北海道新聞夕刊に「珍鳥アネハヅル ひらり 長都沼」という記事が掲載されました。北海道ではもちろん、全国的にも目撃例の少ないアネハヅルにつき、この記事の情報提供者である林稔さん(札幌市白石区在住)から、より詳しい観察記録と写真を寄せていただきましたので、北海道でのこれまでの記録と合わせて紹介します。



アネハヅル 2012. 3. 15 林稔さん撮影

林さんがアネハヅルを目撃・写真撮影したのは、2012年3月15日の午前7時半くらいです。場所は千歳市根志越で、第14号排水路の長都沼と呼ばれている部分の南端近くに架かる鶴沼橋からさらに南側の水路左岸堤防上です。アネハヅルは「毛繕いをして20分くらいで飛び立った」ということです。何枚か撮影された写真を見る限りにおいては、顔の黒色部と白色部の境界がはっきりしていることから成鳥とみなされます。

アネハヅルはツル類の中では最も小さく、体長90cmくらいです。アジア内陸部などで繁殖し、インドなどで越冬します。ヒマラヤ山脈を越えて渡ることによって知られています。日本には希に迷鳥として飛来する程度で、北海道でのこれまでの記録(年月がわかっているもの)は、広報部が把握している限りでは以下のとおりです。紙面の都合上、各記録の出典は略します。

- 1973年5月7日～6月3日 稚内市富磯
- 1974年6月 白糠町
- 1974年5, 6月 音別町(現釧路市音別町)
- 1976年7月 月寒種羊場(現札幌市豊平区羊ヶ丘)
- 1982年5月31日 別海町西春別

1986年10月25日～11月26日ウトナイ湖(苫小牧市)

- 1991年6月10日 八雲町立岩
- 1992年6月29日 豊富町西豊富
- 1995年5月21日 標茶町多和
- 1997年6月下旬～7月上旬 広尾町
- 2000年6月1日 積丹町来岸
- 2008年6月6日 遠軽町

以上12例ですが、1974年の白糠町と音別町の記録は同一個体と推察されます。目撃個体数は、1991年八雲町の3羽、1997年広尾町の2羽、2000年積丹町の3羽以外はすべて1羽です。12例中11例は春季(5～7月)で、1986年のウトナイ湖だけが秋季(10～11月)となっており、今回の3月の例は初めてになります。一般的に迷行は春秋の渡り時期に起こりやすいのですが、今回は迷行の中でも例外です。また、3月15日前後において長都沼以外での目撃情報は全く得られていません。当該個体がどのような旅をしていたのか興味あるところです。

サンカノゴイ

この号に2012年4月8日の十勝管内豊頃町でのサンカノゴイ記録が池田亨嘉さんによって報告されていますが、長都沼でも記録されたので紹介します。2012年4月14日の午後2時過ぎ、空知管内長沼町との境界近くにあるあずま屋・駐車スペースの少し南側で用水路が入り込むあたりです。地名としては千歳市中央になります。

観察者は当会会員の横山加奈子さんと、岸近くで独特の擬態ポーズを決め込む1羽を目撃・写真撮影しました。当



サンカノゴイ 2012. 4. 14 横山加奈子さん撮影

日は土曜日で、長都沼に鳥を見に行った人もいると思いますが、目撃者は横山さんだけのようです。10分間ほど観察したり写真を撮ったりしていたけれども、掲載写真のポーズのままだったとのこと。横山さんの前後に同じ場所を通った人がいたことは十分考えられます。比較的近い距離のところをいたそうですから、擬態が効果的だったのかもしれない。

サンカノゴイは迷鳥である前項のアネハヅルと違って、北海道では確実な繁殖記録はないものの、「まれな夏鳥」とされています（藤巻裕蔵，北海道鳥類目録改訂3版，2010）。池田さんの報告では「道東と比べ、苫小牧市勇弘

周辺では比較的多くの記録があるようです」と書かれていますが、これはあくまで相対的なもので、勇弘でも近年の目撃例は少なく、環境省絶滅危惧ⅠB種、北海道絶滅危惧種に指定されているのが現状です。

勇弘ではありませんが、2006年4月11日の伊達市長流川河口付近での記録が本紙に報告されています（篠原盛雄，北海道野鳥だより第144号，2006）。今号では2例を紹介できました。個体数が少ないことに加え、夜行性であったり、擬態をしたりで、出会えることはめったにないと思いますが、生息・飛来状況を把握しておくためにも、目撃情報がありましたら是非お寄せ下さい。

最果てのセキレイ

北海道希少生物調査会代表 寺島 淳一

【まえがき】

私は、生物の分布や地域特性を調べ、報告する調査会社に所属しています。

本格的に鳥に興味を持ったのは、札幌市円山動物園勤務の頃、北海道野鳥愛護会の白澤昌彦氏と出会ったことがきっかけと言えます。余談ではありますが…私の人生を左右したものが2つあります。1つは円山動物園で働くきっかけとなった、シガニー・ウィーバー主演「愛は霧のかなたに」という映画、そして前述の白澤氏との出会い。この二つがあって、私は今の仕事に辿り着いたと思っています。この場を借りて、白澤氏に感謝したいと思います。その節はお世話になりました…。

さて、つまりは野鳥愛護会とのご縁は深く、この度の原稿依頼はある意味、運命じみたものを感じるころなのです。

【初見】

ツメナガセキレイ (*Motacilla flava*)。この鳥に出会った

のは、かれこれ10年ほど前の天塩川下流部でした。当時、天塩川の河岸には、砂丘草原が広がっていました。この頃の私は、まだ右も左もわからず、調査補助としての役割をいただくも、記録を取っては、種名を聞き直して、書き直して…の繰り返しでした。振り返ると、当時の私を応援したくなります。

そんな状態ですから、エゾニュウの頂にとまるセキレイ類に気づくも、彼らが夕日を背にして尾を振る姿をじっくり観察する時間はありませんでした。

その美しさが気になって、後に図鑑片手に調べたところ、彼らの名前は「ツメナガセキレイ」だということを知りました。以来、私にとって憧れの鳥の一つとなっていきました。

【繁殖地】

それからしばらく経ち、私はいつの間にか毎年のように、サロベツ原野に足を運ぶようになっていました。

何度も足を運ぶうちに、毎年決まった場所でツメナガセキレイに出会えることがわかったからです。そこが繁殖場所と考えた私は、その一帯（旧河川のほとりにある低茎草原）を継続的な観察フィールドにしてみようと思いたちました。

見れば見るほどに美しいレモン色。エゾニュウや灌木にとまる姿が、背景の若葉色にうまく同化することがあります。まさに機能美と言えるでしょう。

シャッターを切り、「あ、ホントに爪が長い」なんて感動しつつ、ある日、幼鳥が巣立った後の営巣地と思われる場所を歩いてみました。

灌木の根元を探せど、なかなか巣は見つかりません。終いには「ちょっとお邪魔します」なんて言った手前、長居



浜風に揺られて



恋歌を口ずさむ

するのが申し訳なくなってしまう、探索を諦めてしまいました。この場所では今も、繁殖期に出入りする個体を見ることができるのですが、巣の状況は未だにわかりません。謎はとっておくものです。と、毎年のように自分に言い聞かせて、はや5年が経とうとしています…。

さて、余談ではありますが、ツメナガセキレイ以外にも、サロベツ原野には楽しみがあります。

まず、独特の涼しげな日差しを浴びて、牧草のニオイを嗅ぐこと。そうしていると、不思議な浮遊感を感じ、自然と一体になれた気がするのです。

薄暮時ともなれば、利尻の夕焼けと、寒々とした原野が、何とも言えぬ寂しさを生み出し、少しだけ自分に酔ってしまうという現象が生じます。

また、写真家の富士元寿彦さんに出くわすこと。これもまた楽しいひと時です。…といったように、サロベツ原野の魅力は、たくさんあるのです(?)。

【危機??】

さて、研究するでもなく、なんとなく見ていて思うのは、サロベツ原野一帯では、低茎草地在主体の環境であれば、

彼らは広く観察できるということ。草地の乾湿の程度に何らかの傾向があるかと思いきや、ざっと見る限り、それを強く感じることもありません。

湿性草地、堤防法面、採草地・多様な環境でその姿を見ることができます。ハクセキレイのように、人工物にとまっていることもあります。

このような状態ですから、サロベツ原野において、ツメナガセキレイは農地や芝地などの人工草地でも繁殖していると思われます。ともすると、毎年のように人の手が入る採草地や堤防法面では、彼らの営巣に何らかのストレスがかかっている可能性が十分に考えられます。

このことに関して、研究も保全対策も十分に進んでいない現状があります。個人的には強く憂うところでございます。

【展望】

近年、石狩でもツメナガセキレイを確認している旨を伺いました。サロベツに毎年行くのも正直辛くなってまいりましたので、石狩で探すことも検討したいと思っています。



夕焼けの日本海

【閑話】 野鳥あれこれ TVや映画の中の双眼鏡画面



左図のような画面をテレビや映画で時々見かけることがあると思います。「双眼鏡で見えていますよ。」というお約束画面です。でもちょっと変ですね。双眼鏡の使い方では最初に教わることは、「眼幅を調整して、左右の視野が一つに重なるようにしましょう。」です。図のようになっていたら、左右の眼それぞれのピントをいくら合わせても、両眼で見ると二重になってしまい、とてもとても見られたものではありません。でも、こんな風にワイド画面になる双眼鏡があったらいいですね。音源(鳥の鳴き声場所)探知機能付き双眼鏡も開発されたらと密かに願っています。

広報部 樋口 孝城

鳥類標識調査：標識される鳥の負担について

山階鳥類研究所保全研究室 仲村 昇

鳥類標識調査は、野鳥の移動や生態等を調べるために、捕獲して何らかの「標識(目印)」を装着し、1羽1羽を確実に個体識別する調査手法です。重要な野鳥調査法の一つであり、様々な種を対象に、世界各国で行われています。鳥類標識調査の概要については、環境省生物多様性センターと山階鳥類研究所の関連ウェブサイトをご覧ください。今回は「捕獲されて、いくつものリングを付けられて、鳥がかわいそう。鳥たちに影響はないのだろうか。」という疑問・質問への回答を中心に関連事項についてご説明します。

1. カラーリングとカラーフラッグについて

日本で野鳥観察に見かける主な標識は、環境省の金属リングと、プラスチック製のカラーリング、カラーフラッグでしょう。

カラーリングやカラーフラッグは、色の組み合わせや、大きく印字された少数の文字記号の読み取りにより、再捕獲しなくても観察により個体(または放鳥地域)を特定できる長所があります。このため、繁殖地での生態調査でもしばしば使用されます。短所は字数が限定されるので組み合わせ数が少ないことと、紫外線による劣化のため比較的短期間で破損して脱落しやすいことです。小さなリングの場合、読み取り可能な文字を刻印できないので、色だけの組み合わせとなり、組み合わせ数はさらに少なくなります。

カモメ・アジサシ類やシギ・チドリ類は海岸など開けた場所にいることが多いため、比較的遠くからも標識を観察できます。しかし、遠距離観察の場合、カラーリングの有無の確認や色の判別が難しいので、視認性が高いカラーフラッグを使う利点が大きくなります。逆に、森林やアシ原に生息する鳥では、フラッグを使用する利点はほとんどありません。

シギ・チドリ類は、南北半球にまたがる長距離の渡りを行うので、渡りを効率的に調べるために、移動ルートの国々(日本の場合、東アジア・太平洋フライウェイの国々)の間でフラッグに使用する色の組み合わせが重複しないように調整して、各地で2つのカラーフラッグを装着しています。このような国際的な枠組みの調査とは別に、アラスカやロシアなどでは繁殖地での生態調査のために、巣の位置がわかっている個体を識別するために追加でカラーリングを装着することもあります。このような個体は滅多にいませんが、最も多い場合には、金属リングとカラーフラッグ2個(渡り調査用)に加えて、さらにいくつかのカラーリング(生態調査用)を装着されることになり、「こんなにいっぱい着けなくても」と思われる方がいるのも良くわか

ります。しかし、体重に対する負荷については考慮されています。発信機などの機材については、体重の4%以内という国際的な目安があります。金属リングは小鳥類で体重の0.3~0.4%、大型の鳥では0.1~0.2%に相当します。小鳥にさらにカラーリングを3つ加えても体重の1%程、さらにカラーリングとフラッグも加えたシギでは総重量は1.5%程度になると思います。たくさんの標識をつけられて、見た目は重そうでも、現実にはアラスカやロシアから日本まで到達できたということは、海を越える旅を不可能にするほどの負担ではなかったと考えることもできるのではないのでしょうか。なお、重さの負担とは別に、リングに糸などが絡む危険性もあるため、装着の際には隙間ができないように細心の注意が必要です。

2. 捕獲による負担

捕獲をすると、鳥には確実に負担がかかっています。負担には、大きく分けて、肉体的な疲労と精神的なストレスがあります。扱いが悪いと小型の鳥は弱ったり死亡することがあるため、捕獲作業中は常に天候や気温及び鳥の状態に注意する必要があります。しかし、精神面について言えば、私は精神的なショックで死亡したと思われる鳥を見たことはありません。捕獲された鳥はストレスを感じているはずですが、鳥は精神的にかなりタフだと感じることもあります。例えば、しつこく人の手を咬んだりつついたりして攻撃をやめない個体や、保定する手の力が僅かにゆるんだ隙について逃亡する個体を見ると、「巨大な人間に捕獲された恐怖におののいて、ショック死寸前」という表現よりも、「最後まで諦めずにチャンスをうかがい、無駄に暴れず体力を温存する」などという表現の方が似合っているように思えます。

同じ場所で調査をしていると、数日後あるいは数カ月後、数年後に同じ個体が再捕獲されることがあります。元々小鳥は1年目の生存率が高くないはずなのですが、このような生き残り個体との再会は珍しくないことから、私達バンダーは体験的に、短時間の拘束と標識装着は、鳥達に過大な負担を与えていないと考えています。網にかかってから放鳥されるまでの時間は、多数が同時に捕獲された場合には若干長引くことがありますが、一般的に1時間以内です。

稀な例ですが、同じ日に何回も網に飛び込む個体や、数日間連続して捕獲される個体もいます。体力面の心配の他に、学習能力が他の個体よりも劣っているのではないかと心配になりますが、このような個体からは、頻繁に捕まっている個体でも、体力の消耗による死亡はほとんど発生してい

ないであろうことがうかがえます。野鳥も野生動物である以上、暑さや寒さ、嵐や飢え、捕食者などの様々な危険を乗り越えた個体の子孫をつないで来ています。弱々しいだけの存在ではなく、タフな一面も持っていると感じています。

標識観察報告のお願い

標識の多くは、装着後にどこかで発見されたという報告

が届いて初めてデータになります。バンダーからの報告だけでなく、一般の方からの発見報告も重要なデータになっています。標識された個体の負担をできる限り無駄にしないためにも、カラーリングやフラッグ、金属リングの番号などを観察・撮影された場合には、是非ご連絡下さい。皆様のご協力をお願いいたします。

鳥達の奇妙な分布～北海道の鳥は北の鳥？～

京都府在住会員・日本鳥学会会員 梶田 学

本州に住む私たちから見ると、本州以南には生息せず、北海道だけで見られる鳥には「北国の鳥」というイメージがあります。北国の鳥だから「寒いところに適応した鳥」だろうとも思ってしまいます。例えば、ヤマゲラやショウドウツバメ、ハシブトガラなどがこれにあたります。また東北地方にも多少分布するもののノゴマやクマゲラ、ベニマシコ、チゴハヤブサなども同じ様に北海道の鳥＝北国イメージのある鳥です。このような北国イメージは、亜種にもあって、ミヤマカケスやシマエナガは、その例でしょう。これらはいずれも北海道を代表するような鳥達ですね。

ところが意外にも今、ここで挙げた鳥達は必ずしも「北国の鳥」ではないのです。さて、皆さんの手元には野鳥の図鑑があると思います。そこには種ごとの分布図が掲載されているのでしょうか？ 普段はあまりマジマジと見る事のない分布図ですが、この文章はぜひ分布図を見ながら読み進めてみて下さい。

まずはヤマゲラ。確かに日本国内では本州以南には生息せず、北海道だけに分布を示す色が塗られています。しかし、日本海を挟んだ大陸側に目をうつすと、ずっと南の方にまで分布していて、本州どころか沖縄と同じ緯度のところにも生息し、それより南の台湾にも分布しています。これでは、ちっとも「北国の鳥」じゃあないですね。

分布していても良さそうな範囲の中なのに、本州、四国、九州とその周辺離島（南西諸島を含む）にだけヤマゲラは、



ヤマゲラ

住んでいないのです。これだとヤマゲラが本州などへ迷行してきても必ずしも北海道からとは限りません。同じ緯度の大陸側から日本海を越えてとか、台湾から沖縄へひょっこりやってくるという事も十分ありそうです。本州以南に住む人はヤマゲラ＝北海道限定の鳥のイメージが強すぎて、ヤマゲラが自分の住んでいるところに迷って来るとは普段思ってもいないものです。でも、アオゲラだと思って良く見ないでいると、こっそりヤマゲラが混じっていたりするのかもしれない。先入観は怖いですね。実際にヤマゲラは栃木県日光に迷行してきて標本が採集された古い記録があります。逆に北海道にアオゲラがひょっこりという事もあるかもしれませんが、こちらは実例が今のところ知られていません。噂は時々聞きますが。

なぜ、ヤマゲラが本州以南の日本国内にだけ生息していないのか？ 良く言われるように津軽海峡が海になってしまったので、それより南下できなかったのか、はたまた、本州へ侵入したヤマゲラがその後アオゲラになって（進化して）しまったからなのか？ それとも近縁種のアオゲラが本州以南に生息しているため、競争になってしまってヤマゲラは住み着けないのか？ 答えは今も出ていません。

さて、もうひとつ例を見てみましょう。今度は北海道の代表的夏鳥であるショウドウツバメです。これも日本国内では、北海道にだけ分布（繁殖分布）するのですが、大陸側に目を転じれば、やっぱり随分南、沖縄と同じ緯度ぐらいにまで繁殖分布しているのがわかります。私の住んでいる京都でも、秋の渡りの時期には、普段見る事のできないショウドウツバメが群れをなして飛んで行くのを見る事ができます。それを見ると「ああ、はるばる北海道からやってきたんだなあ」と感慨に耽ったりするのですが、意外とより近い大陸側から飛んで来ているのかもしれない。しかし、いかにもライバル的に見えるアオゲラがいるヤマゲラと違って、ライバルのいなそうなショウドウツバメがなぜ本州以南では繁殖しないのでしょうか？ やっぱり津軽海峡の問題なのか、それとも営巣に適した環境がないからなのか？ 定説は全くありません。少なくとも津軽海峡を飛び越えられないということはなさそうですが…。滋賀県など

で見る春の渡りの時期のショウドウツバメは、電線に止まって求愛ディスプレイを繰り返していたり、巣材につかう枯れ草をくわえて飛び回っている事がありますから、意外と本州でも繁殖していたりするのかもしれませんが。北国の鳥という思い込みは禁物ですね。

ここに例示した2種と同じ様に文頭にあげたいいくつかの種についても分布図を確認してみてください。いずれも大陸側では北海道よりもずっと南にまで分布が広がっているのがわかると思います。ちなみにハシブトガラは分布図を見る時には、隣りに並んでいるコガラの分布図も見て下さい。本州以南の人には北国イメージの強いハシブトガラよりも、むしろコガラの方がより北まで分布しているのがわかると思います。亜種に目を転じてみても、北国イメージのシマエナガやミヤマカケスは、大陸側では北海道より南にまで分布しています。日本国内で根強い北海道の

鳥イコール北国の鳥というイメージは、種によっては国内だけで通じるものみたいですね。

とはいえもちろん、イメージ通りほんとうの「北国の鳥」もいるんです。例えば、シマフクロウ。この鳥は分布図で日本国外の分布を見ても、北海道と同じ位の緯度までしか分布していません。ほんとの「北国の鳥」なのです。その他にも国内で北海道にしか生息してなくて、実際にも北国の鳥である種はいくつもいます。北海道の鳥のうち、ほんとうに「北国の鳥」は、どれでしょう？分布図を眺めながらそんな事を考えるのも楽しいものです。

では、最後にクエスチョン。シマフクロウと同じように日本国内では北海道でのみ繁殖例あり、印象としては「北国の希少種」のワシミミズク。さてこの種は、ほんとの北国の鳥でしょうか？それとも……答えは手元の図鑑の分布図で確認してみてくださいね。

平成24年度 総 会 報 告

日 時：平成24年4月13日(金)午後6時30分～8時00分

場 所：かでの2・7 310会議室

小堀煌治会長の挨拶のあと、議長に戸津高保氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり可決、承認された。

〈議 事〉

1. 平成23年度事業報告

[総 務]

(1) 野鳥写真展の開催

開催期間：平成23年5月10日(火)～5月22日(日)

開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー

出 展：17名、32点

(2) 「野鳥だより」の発送 (164号～167号)

(3) 野幌森林公園自然ふれあい交流館写真展

開催期間：平成23年6月1日(月)～6月30日(火)

出 展：17名、32点

(4) 新年野鳥講演会、野鳥写真映写会の開催

日 時：平成24年1月7日(土)、13:30～16:30

場 所：札幌市男女共同参画センター 4階大研修室

講 師：早矢仕有子氏 (札幌大学法学部准教授)

演 題：シマフクロウとの付き合い方

参加者：86名 (野鳥写真提供者5名)

(5) 北海道野鳥愛護会名入りカレンダーの作成・販売

(80部)

(6) 定例幹事会の開催 (各月1回、計12回)

(7) 傷害保険の更新

[広 報]

(1) 「北海道野鳥だより」164号～167号の発行

(2) ホームページの維持・運営

[探 鳥]

(1) 探鳥会26回 (1回平均31名)

[会 計]

(1) 平成23年度決算報告

(2) 平成23年度会計監査報告

村野紀雄監事から適正に処理されている旨の報告があった。

2. 平成24年度事業計画

[総 務]

(1) 野鳥写真展の開催

開催場所：北電ギャラリー

開催期間：平成24年5月7日(月)～5月17日(木)

(2) 「北海道野鳥だより」の発送 (168号～171号)

(3) 野幌森林公園自然ふれあい交流館写真展

開催期間：平成24年6月1日(金)～6月30日(土)

(4) 新年野鳥講演会、野鳥写真映写会の開催

平成25年1月予定

(5) 北海道野鳥愛護会名入りカレンダーの作成・販売

(80部)

(6) 定例幹事会の開催 (各月1回、計12回)

(7) 傷害保険の更新

[広 報]

(1) 「北海道野鳥だより」168号～171号の発行

(2) ホームページの維持・運営

[探 鳥]

(1) 探鳥会27回 (宿泊探鳥会を含む)

[会 計]

(1) 平成24年度予算 (案)

[その他]

(1) 当会の今後を考え、会員増加対策、探鳥会のあり方、企画探鳥会開催等についてフリートークで議論した。

[役員人事]

井上公雄顧問が退任した。白澤昌彦代表幹事が副会長に就任し、岩崎孝博幹事が後任の代表幹事になった。昨年ご逝去された蒲澤鉄太郎監事の後任には吉中宏太郎会員が就任した。中正憲信幹事に代わり、坂井伍一幹事が探鳥幹事代表になった。総務幹事に辻雅司会員、浜野チエ子会員、原美保会員、広報幹事に島田芳郎会員が加わった。

[平成24年度役員]

顧問 藤巻 裕蔵
 会長 小堀 煌治
 副会長 戸津 高保、樋口 孝城、白澤 昌彦
 監事 村野 紀雄、吉中宏太郎
 会計幹事 清水 朋子、横山加奈子
 代表幹事 岩崎 孝博

幹 事

(総務)◎畑 正輔、栗林 宏三(兼)、佐藤ひろみ(兼)、
 品川 睦生、竹内 強、辻 雅司、
 中正 憲信、浜野チエ子、原 美保、
 松原 寛直、横山加奈子(兼)
 (探鳥)◎坂井 伍一、梅木 賢俊、門村 徳男、
 栗林 宏三、後藤 義民、佐々木 裕、
 佐藤ひろみ、田中 陽、富川 徹、
 成澤 里美、早坂 泰夫、松原 寛直(兼)、
 鷺田 善幸
 (広報)◎樋口 孝城(兼)、岩崎 孝博(兼)、北山 政人、
 島田 芳郎、白澤 昌彦(兼)、高橋 良直、
 武沢 和義、道場 優、戸津 高保(兼)、
 道川富美子

(◎印は各担当の代表者)

平成23年度 決 算 書

(収入の部)

項目	予算額	決算額	予算比(▲減)	備 考
個人会費	490,000	640,000	150,000	
家族会費	100,000	129,000	29,000	前納、後納を含む
団体会費	15,000	20,000	5,000	
事業収入	40,000	53,370	13,370	講演会参加費、カレンダー売上他
雑収入	3,306	11,116	7,810	利息他
寄付金	10,000	78,400	68,400	個人寄付 蒲澤則子様他
小計	658,306	931,886	273,580	
繰越金	241,694	241,694	0	
合計	900,000	1,173,580	273,580	

(支出の部)

項目	予算額	決算額	予算比(▲減)	備 考
印刷費	450,000	458,505	8,505	野鳥だより印刷費
通信費	110,000	116,434	6,434	会報発送費、切手代
会議費	40,000	34,250	▲5,750	幹事会、総会会場費
交通費	16,000	14,500	▲1,500	発送時交通費
消耗品費	20,000	33,413	13,413	腕章・幟、用紙代
報償費	55,000	55,000	0	事務所費用、講師謝礼
傷害保険費	16,000	15,700	▲300	保険代
雑費	50,000	51,560	1,560	写真展費用、ウトナイ湖利用料他
予備費	143,000	0	▲143,000	
基金積立	0	0	0	
合計	900,000	779,362	▲120,638	

1,173,580(収入) - 779,362(支出) = 394,218(次年度へ繰り越し)

平成24年度 予 算 書

(収入の部)

項目	本年度予算	前年度予算	前年比(▲減)	備 考
個人会費	490,000	490,000	0	
家族会費	99,000	100,000	▲1,000	前納、後納を含む
団体会費	15,000	15,000	0	
事業収入	40,000	40,000	0	講演会参加費、カレンダー、道庁他
雑収入	11,782	3,306	8,476	利息他
寄付金	10,000	10,000	0	個人寄付
小計	665,782	658,306	7,476	
繰越金	394,218	241,694	152,524	
合計	1,060,000	900,000	160,000	

(支出の部)

項目	本年度予算	前年度予算	前年比(▲減)	備 考
印刷費	460,000	450,000	10,000	野鳥だより印刷費
通信費	120,000	110,000	10,000	会報発送費、切手代
会議費	40,000	40,000	0	幹事会、総会会場費
交通費	16,000	16,000	0	発送時交通費
消耗品費	20,000	20,000	0	事務用品他
報償費	55,000	55,000	0	事務所費用、講師謝礼
傷害保険費	16,000	16,000	0	保険代
雑費	10,000	50,000	▲40,000	ウトナイ湖利用料他
予備費	223,000	143,000	80,000	
基金積立	100,000	0	100,000	
合計	1,060,000	900,000	160,000	

積立基金特別会計

(23年度収入決算)

項目	金額
積立金	400,000
一般会計より繰入	0
合計	400,000

(24年度収入予算)

項目	金額
積立金	400,000
一般会計より繰入	100,000
合計	500,000

会 員 数

	20. 4. 1	21. 4. 1	22. 4. 1	23. 4. 1	24. 4. 1
個人	286	271	260	255	256
家族	33	36	38	39	39
団体	2	2	3	3	3



円山公園

2012. 3. 4
札幌市中央区
渡辺 早苗

今回初めて参加させていただきました。開始直後は雪模様で心配しましたが、熱心な方々が多く、40名近くの参加者がいらっしやいました。

今年は厳冬で冬鳥の飛来が少ないと聞いておりましたが、それでもシジュウカラ、ゴジュウカラ、ヤマガラ…よく見かける野鳥達はとても愛らしいものです。

探鳥会に来たのに珍しい鳥がいなければがっかりする…方もいらっしやるとは思います。以前、円山動物園の飼育員さんにこんなアドバイスを受けたことがあります。「身近な野鳥を1種類、1年間かけて徹底的に覚えてごらん。春夏秋冬の鳴き声、飛び方や子育て。そうやって生態をよく知ると10年で10種類にもなる。それってスゴイ事とは思わない？」

その時は心の中で「多くの種類を覚えたいのに」なんて思っていたのですが、いざ、白紙の紙にシジュウカラを描いてみようと思っても意外と描けないのですし、珍しい声をする！と思ってもいつものゴジュウカラだったりします。

日課にしている円山登山をしている中でも毎日様子が変わる景色や生き物達の姿に飽きる事はありません。そして、1つ1つが大切に思えてきて、じっくり観察する事の楽しさも分かってくるようになりました。『よく見かける鳥達』が普通にいる事は幸せなことですし、幸せを普通にもらっている私達は感謝しなければいけませんね。

円山はブランド化し、高層マンションが立ち並ぶ地区となりましたが、円山公園、原始林は野生生物がまだまだ沢山いる貴重な場所です。謙虚な気持ちを忘れず、観察と保護のバランスを考えながら札幌の財産として未来まで豊かな自然を繋いでいきたいものです。

【記録された鳥】コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、カワラヒワ、シメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上17種

【参加者】秋山洋子、阿部真美、いとうきよはる、伊藤信治、井上詳子、今村三枝子、岩崎孝博、白田 正、内山英晋、おおふじみき、栗林宏三、香内 実、後藤義民、坂井伍一・俊子、笹森繁明、品川睦生、白澤昌彦、高橋宣子、高橋良直、田中 陽・雅子、田辺 至、中正憲信・弘子、畑 正輔、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城・陽子、広木朋子、辺見敦子、道川富美子、山田甚一、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎、渡辺早苗、渡会やよび 以上39名

【担当幹事】白澤昌彦、中正憲信

ウトナイ湖

2012. 3. 17

【記録された鳥】ウsp.、トビ、オジロワシ、オオワシ、オオハクチョウ、コブハクチョウ、ヒシクイ、マガモ、ヒドリガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、シロカモメ、アカゲラ、コゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ムクドリ、カササギ、ハシボソガラス 以上29種

【参加者】荒木良一、石田卓也、井上詳子、白田 正、柏葉 明、香内 実、北山政人、後藤義民、小堀煌治、品川睦生、坂井伍一・俊子、佐々木伸行、高橋良直、谷口勇五郎、中正憲信・弘子、長谷川 功・伊都子、原 美保、畑 正輔、浜野チエ子、林 充憲、樋口孝城・陽子、広木朋子、本間康裕、横山加奈子、吉田慶子、鷺田善幸、渡会やよび 以上31名

【担当幹事】品川睦生、鷺田善幸

モエレ沼

2012. 4. 15

札幌市東区 五十嵐 加代子

モエレ沼探鳥会は何年振りでしょうか？ 思っていたより雪が多く、寒い！ でも以前の探鳥会も橋の上は寒かった記憶があります。ところが夏鳥のオオジュリンに出会えました。雪の上の枯れ枝に止まっているオオジュリンです。これまでのオオジュリンの姿は、緑の草原の枝に止まり、元気いっぱいさえずっている姿しか記憶がないので、とても感動的でした。すると、ヒバリも土の上で発見！ 寒い！ でも春なんですね。野鳥たちに春を告げられました。今度は、また、夏の緑の草原でさえずっているオオジュリンさんたちに会いたいなあ。

【記録された鳥】カイツブリ、カワウ、アオサギ、トビ、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、オオバン、カモメ、シロカモメ、ユリカモメ、キジバト、アカゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ノビタキ、ハシブトガラ、シジュウカラ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上33種

【参加者】青山和正、秋田雅雄、秋山洋子、荒木良一、五十嵐加代子、石田卓也、伊藤喜多子、今泉秀吉、岩崎孝博、白田 正、内山英晋、大表順子、大橋 晃、岡本健太郎、川東保憲・知子、川村政博、川村幸子、北山政人、栗林宏三、くわばらみは子、香内 実、小松正幸、坂井伍一、佐藤澄子、品川睦生、齊藤直子、島田芳郎、白澤昌彦、杉田範男、高正みちえ、高田征男、高橋良直、田中志司子、道場 優、戸津高保、中正憲信・弘子、中田勝義、長谷川功、

長谷川伊都子、畑 正輔、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城・陽子、広木朋子、本間康裕、松原寛直・敏子、丸島道子、村上茂夫、村田睦子、やましたやすのり、山本昌子、横山加奈子、吉中宏太郎・久子、渡会やよひ 以上59名

【担当幹事】北山政人、道場 優

宮 島 沼

2012. 4. 22

札幌市手稲区 坂井 伍一

宮島沼の氷が解けて、少しでも開けていることを祈りつつ車を走らせますが、中沼あたりから田畑は雪に覆われて、ハクチョウ達の採餌風景を見ることがないまま、宮島沼に到着しました。天気は晴れ、無風状態で絶好の探鳥会日でしたが、沼はほとんど氷に覆われ、マガンの姿を見ることができません。

宮島沼水鳥・湿地センターから観察場所までの通路の両脇には40～50cmの雪が残っており、ゲートも半分以上雪の中に埋まっている状態でした。センターレンジャーの牛山さんから、過去の沼開けの時期、マガンの渡りルートなどの説明を受け、探鳥を開始しました。最初は、沼の奥に少しだけ水面が出たところにいるカワアイサ、ミコアイサを観察していましたが、そのうちに参加者のほとんどが沼とは逆の方向を見て夏鳥探しを始め、アリスイ、ヒバリ、ノビタキ、アオジ、ベニマシコなどを観察しながら、時折カハハんと鳴きながら上空を飛ぶマガンを見るという今まで経験したことがない探鳥会になりました。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、ノスリ、オオハクチョウ、マガン、ミコアイサ、カワアイサ、シロカモメ、キジバト、アリスイ、アカゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、ノビタキ、ハシブトガラ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、ニューナイスズメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上22種



雪に埋まっていた宮島沼

【参加者】阿部真美、岩崎孝博、内山英晋、大表順子、川東保憲・知子、坂井伍一、品川陸生、島田芳郎・陽子、田中 陽・雅子、中正憲徳・弘子、浜野チエ子、原 美保、本間康裕、山下泰範、山本和昭 以上19名

【担当幹事】坂井伍一、田中 陽

野 幌 森 林 公 園

2012. 4. 29

江別市大麻 大表 順子

午前9時の集合時間前から三々五々、参加者の方々が集まりました。公園を散策する方たちが今日は何があるのと訝しげにこちらを見ながら歩き出します。

春を待ちかねた人たちが50名近く集まり出発です。福寿草、エゾエンゴサク、水芭蕉、ザゼンソウ、春いちばんに咲く花たちが出迎え、私たちを楽しんでくださいと囁いているように感じ、ありがとうと心の中で言葉をささやきました。

アオジが囀っています。そこへクロツグミだと、どなたかの声に皆で居場所を探します。見つけてくださった方の説明に、懸命に探しますが、なかなか難しいもので何度も教えていただき、やっと見つけることができました。いつもながら皆さんの発見するスピードに驚いているのですが、私はいつになったら、そのようになれるのかと落ち込んでしまいます。でも、今日はそんな暇はありません。会いたい鳥たちがたくさんいます。一人で鳥見をしている時にはクロツグミは見つけにくい種類なので（色が地味だからでしょうか）喜んで楽しませて頂きました。エゾユズリハコースに出ると延齢草も咲いています。つい2～3日前にはまだだったのに、もう咲いていますよ。

ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラといつもの仲間たちもそろって出迎えてくれます。藪の中ではヤブサメが鳴いています。「高い声なので年と共に、この声が耳に入らなくなるけど、まだ大丈夫？」と中正さんから教えていただき、妙に納得できましたがどうしてかな？ 鶯もホーホケキョとおっとり囀りだしましたが、なかなか姿を現してくれない憎い奴です。

大沢の池には、マガモ、カイツブリ等がいました。まだ水は冷たそうですが、そんなこと、ものともせずに泳いでいます。カイツブリは巣造りの準備をしていると教えていただき、そんな事もわかるのとビックリです。予定の時間があるので少し急いでと幹事さんからはっぱがかり渋々と急ぎますが、本当に早く歩いているのかな？

大沢園地に着き、お弁当をひろげ楽しい時を過ごしていると、空からの贈り物がポツリ、ポツリと……。12時20分出発の予定でしたが、ひどくならないうちに帰りたいと早めの出発で、ここからは急ぎ足になり雨も酷くはならず、さほど濡れずにすみ、よかったね！ 鳥合わせ後、解散ですがたくさんの春を見つける事が出来ました。有難うございます。またよろしくお祈りします。

【記録された鳥】カイツブリ、アオサギ、トビ、ハクチョウsp.、オシドリ、コガモ、マガモ、キジバト、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ミンソザイ、コルリ、ルリビタキ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、ア

オジ、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、ハシブトガラス
以上32種

【参加者】青山和正、青山留美子、秋山洋子、伊藤信治、井上公雄、井上詳子、内山恭子、内山英晋、宇山公子、大表順子、大坂博記、川東保憲・知子、北川博一、木下米子、栗林宏三、香内 実、後藤義民、小西峰夫・美美枝、坂井伍一、沢田浩一、品川睦生、白澤昌彦、高田征男、高橋きよ子、高橋貞夫、高橋利道、高橋宣子、田辺 至、辻 雅司・方子、中正憲佑・弘子、中田勝義、野坂英三、野田貴代子、蓮井 肇、畑 正輔、広木朋子、松原寛直・敏子、村上茂夫、山本昌子、横山加奈子、渡辺好子、渡会やよひ
以上47名

【担当幹事】後藤義民、横山加奈子

オオルリと出会えた雨の藤野マナスル(藤の沢)
2012. 5. 5
札幌市駒岡小学校教諭 秋本 秀人

4年前、初めて探鳥会に参加した時にクマガラと出会い、その貴重さもわからないまま、ただただ感動して以来、毎年参加しています。あの時、本格的に野鳥観察に取り組んでみたいと思った2年後、鳥がとりもつ縁なのか学校林を持つ駒岡小への転勤が決まりました。勤務して1年が経ち、鳴き声や姿でわかる鳥の種類も増えました。野鳥撮影にもハマリ、休みの日にも学校林を散策して鳥の姿を追っかけて回っています。

探鳥会の4日前に学校林でオオルリのきれいな鳴き声を耳にし、その姿を撮影しましたが、残念ながら逆光できれいな青がほとんど紺色になっていました。きっと藤の沢では、オオルリが見られるぞ、と意気込んで参加しました。

当日は、あいにくの小雨模様。しかも幹事の方から「先日山頂付近に熊の出没情報が…」という南区ならではのハプニング。自分も藤野在住ですので驚きもしませんでした。探鳥ルートを変更せざるを得ないという事実、ちょっと落胆しました。

しかし、「災い転じて福」というように、鳥を愛する藤の沢小学校さんの貴重な野鳥の剥製資料や小堀さんの撮影した素晴らしい作品を目にすることができ、雨でしめった気持ちもどこかに吹っ飛んでしまいました。それについても小堀さんの撮った鳥の姿は、いきいきと輝いていて自分の写真の未熟さを実感しました。「いつか、あんな写真を撮ってみたい！」そう心から思いました。

期待していたオオルリには、登り口とオカバルシ川沿いの2箇所でお会いすることができました。もしかしたら同じ鳥が待っていてくれたのかもしれませんが。帰り道では、川沿いにぽつんと立っている細い木の枝に目立つようにとまっていた。オオルリって特徴的なあの鳴き声、そしてあの色…実は目立ちたがりの鳥なのかな…なんて思っていました。

また護岸整備されてすっかりきれいになったオカバルシ

川では、仲よく浮かぶオシドリの姿や、川面を逆流するように飛んでいくカワガラスを見ることができました。とても貴重な体験をすることができました。幹事の皆様お世話になりありがとうございました。また、来年も絶対に参加します。

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、オオタカ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、カワガラス、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、
以上31種

【参加者】秋本秀人、秋山洋子、井上詳子、栗林宏三、香内 実、後藤義民、小堀煌治、品川睦生、高橋きよ子、田辺 至、辻 雅司・方子、戸津高保、野田貴代子、蓮井 肇、樋口孝城・陽子、広木朋子、本間康裕、矢島一昭、横山加奈子
以上21名

【担当幹事】小堀煌治、栗林宏三

野幌森林公園
2012. 5. 6

【記録された鳥】アオサギ、トビ、ハイタカ、マガモ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、マミチャジナイ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、ハシブトガラス
以上27種

【参加者】青山和正、秋山洋子、石井健太、伊藤信治、井上公雄、今村三枝子、内山英晋、大表順子、太田敏枝、大森アヤ子、栗林宏三、香内 実、後藤義民、斉藤泰代、品川睦生、清水朋子、杉田範男、高橋利道、田村千秋、内木克巳・靖子、中正憲佑、中山裕子、浪田良三、野坂英三、野田貴代子、樋口孝城・陽子、松原寛直・敏子、蓮井 肇、畑 正輔、花谷 馨・雅子、原田功雄、廣山幸子、辺見敦子、本間康裕、横山加奈子、吉田慶子
以上40名

【担当幹事】松原寛直、畑 正輔

千 歳 川
2012. 5. 13
札幌市北区 加藤 睦子

初参加の私は、前の幹事さんに付こうか後の幹事さんと歩こうかと(打算もあり)ウロウロしているうちに後の方になってしまいました。前方と離れた所でオオルリが現れ、じっくり観察、早々に得した気分で喜んでおりましたら、何とこの感想文を依頼されるという“お土産”をもらうハメになった次第です。(打算のせい?)

初めての千歳川は予想通り自然河川の美しい所でした。足元にはニリンソウがこぼれるように咲き、カツラの大木

は芽吹きから赤味を帯びたかわいい葉に、カラマツは初々しい新緑に、さらに山桜満開、溢れる春の息吹きに私の気分も高まります。見慣れているセンダイムシクイやコサメビタキもここで見ると力強く見えます。エゾムシクイは初めて見せてもらいました。キビタキの飛び行く方向を追ったり、対岸のベニマシコのかすかな響きに耳を傾けたり、鳥探しに集中する姿勢は真剣そのもので、雰囲気にもすこしずつ慣れてきた私です。

私は双眼鏡をのぞき始めて3年目になりますが、有難いことに友人の辻さんがウォッチング歴が長く、親切に教えてもらえるのです。屯田西公園や東屯田遊水地が近くにあり、一年を通して野鳥や水鳥の観察が楽しめるという恵まれた環境も幸いなことです。「定点観察」を続ける毎日ですが、「鳥を風景の中で見る」—そんな思いに最近かられています。出口近くの見上げるほど高い針葉樹の梢の中でさえずるクロツグミの美声は圧巻、ソリストの貫録十分です。広い音域を何種類ものさえずりに変化させ、聞きほれて未だ残響となっています。「風景の中で聴くさえずり」も素晴らしいことです。クロツグミの姿が見られた人は一人だけだった様です。穏やかで親切な方々にスコープを何度も使わせて戴き有難うございました。ぜひまた参加したいと大満足の千歳川探鳥会でした。

【記録された鳥】トビ、ノスリ、オシドリ、マガモ、キジバト、カワセミ、アカゲラ、コゲラ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ミソサザイ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上34種

【参加者】板田孝弘、伊藤 牧、伊藤俊子、今村三枝子、岩崎孝博、江坂嘉昭、大表順子、加藤睦子、川東保憲・知子、栗林宏三、坂井伍一、品川陸生、島田芳郎、白澤昌彦、高橋宣子、高橋良直、辻 雅司・方子、鶴田義明・陽子、

戸津高保・以知子、中島房子、長谷川伊都子、畑 正輔、松原寛直・敏子、横山加奈子 以上29名

【担当幹事】白澤昌彦、栗林宏三

利 尻 島 (宿泊探鳥会)

2012. 5. 18~20

札幌市北区 菊谷 勝男

初めての宿泊探鳥会に妻と2人で参加させていただきました。皆さん方は特にコマドリの姿を求めての旅程の様子。19日早朝の姫沼で早々とその姿を観察できた方々がおりました。私は“ヒンタララララ”と歌声のみ沢山聴く事ができました。

次の森林公園では、姿を心行くまで観察、併せて妻が橋上からミソサザイを発見し観察、感激の連続でした。

2日目の夕食後、小杉氏(利尻島自然情報センター代表)から、コマドリ等に鳥独自の特徴が見られる事、渡り鳥の経路等のお話をいただき、私は地方の風俗、生活習慣も相通ずる物があると思ひ感銘しました。

お天気に恵まれ、島の鳥観察記録(平成18年5月)68種中50数種観察することができ、成果上々の楽しい思い出いっぱい探鳥会でした。

駄作1句 駒鳥や利尻の山の雪ゆるむ

幹事の方々、お世話いただき、誠にありがとうございました。

【記録された鳥】

(メグマ沼) ウミウ、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、スズガモ、トビ、キジバト、ツバメ、ツメナガセキレイ、ノビタキ、ウグイス、アオジ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上16種

(利尻島：フェリー往復航路を含む) オオハム、カイツブリ、ウミウ、ヒメウ、ダイサギ、アオサギ、オシドリ、キンクロハジロ、シノリガモ、ミサゴ、トビ、クサシギ、キアシシギ、オオジシギ、アカエリヒレアシシギ、オオセグロカモメ、ウミネコ、ウミスズメ、ウトウ、キジバト、ツツドリ、

アカゲラ、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、イワツバメ、ハクセキレイ、ビンズイ、ミソサザイ、コマドリ、ノゴマ、アカハラ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、アオジ、クロジ、カワラヒワ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上51種

(サロベツ原野) チュウビ、オオジシギ、アリスイ、ヒバリ、ツメナガセキレイ、ビンズイ、ノビタキ、ウグイス、アオジ、オオジュリン、カ



利尻島宿泊探鳥会集合写真 オタトマリ沼 2012. 5. 19



コマドリ 利尻町森林公園 参加者撮影

ワラビワ、ハシブトガラス 以上12種

【参加者】赤沼礼子、石神直登・美代子、石橋和子、井上詳子、岩崎孝博、内山純一・雅子、大表順子、岡部三冬、菊谷勝男・靖子、岸谷美恵子、栗林宏三、小堀煌治、坂井伍一・俊子、佐々木裕、品川睦生、志田博明、島田芳郎・陽子、清水郁子、高橋きよ子、高橋良直、立田節子、田中志司子、戸津高保、中正憲信、西尾京子、西川喜久世、畑 正輔、濱野由美子、原 美保、樋口孝城・陽子、広木朋子、松原寛直・敏子、道川富美子、山田登志恵、山本昌子、横山加奈子、吉中宏太郎・久子 以上45名

【担当幹事】栗林宏三、坂井伍一、佐々木裕、清水朋子、高橋良直



【野幌森林公園】

2012年7月15日(日)、9月2日(日) 野幌森林公園も7月と9月とではそれぞれ異なる趣があります。大沢園地で昼食をとり、大沢口に戻るの午後1時頃になります。

集 合：野幌森林公園大沢口 午前9時
交 通：JR新札幌駅発、夕鉄バス文京通西行「大沢公園入口」、またはJRバス文京台循環線「文京台南町」下車 徒歩各5分

【石狩川河口】2012年8月19日(日)、9月16日(日)

秋の渡りシーズンの前半と後半に石狩浜・河口で主にシギ・チドリ類を楽しみます。はまなすの丘公園ビジターセンターの前から浜に出て河口まで、河口からは石狩川に沿って戻ります。夏、秋のはまなすの丘公園の植物も楽しめます。全部で4km弱の行程になります。正午近くに駐車場に戻ってから鳥合わせをし、センター内などで自由に昼食をとることになります。

集 合：はまなすの丘公園ビジターセンター駐車場 午前9時30分

交 通：中央バス札幌ターミナル発、石狩行き 終点「石狩」下車、徒歩20分

【鶴川河口】2012年8月26日(日)

鶴川河口付近の自然干潟や人工干潟でのシギ・チドリ類の観察が主目的です。当日の天候次第ですが、人工干潟付近で鳥合わせをし、自由解散となります。「四季の館」に戻って館内ロビーで昼食をとられる方々が大半です。館内には食堂や売店もあります。

集 合：鶴川温泉「四季の館」駐車場 午前9時45分
交 通：札幌駅前または地下鉄大谷地各ターミナル発、道南バス浦河行(ペガサス号)「四季の館」前下車

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り開催します。
☆昼食、雨具、筆記具などをご持参下さい。
☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465
午前10時～午後4時(土・日祭を除く)

鳥民だより

◆平成24年度野鳥写真展出展者・作品◆

- 秋山 洋子 オジロワシ
- 荒木 良一 アオシギ、ハイタカ
- 入江 智一 カワセミ、ウグイス
- 内山 純一 ツメナガホオジロ
- 小堀 煌治 ケアシノスリ、ツツドリ
- 佐伯 武美 アカウソ、キビタキ
- 坂井 伍一 カンムリカイツブリ、ツメナガセキレイ
- 佐藤ひろみ センダイムシクイ、カワセミ
- 漆崎 修 カワガラス、アカハラ
- 品川 睦生 フクロウとゴジュウカラ
ハチジョウツグミとツグミ
- 高橋 良直 ハヤブサ、オジロワシ
- 田中 陽 ジョウビタキ、ノゴマ
- 中正 憲信 ハイイロチュウヒ、ウミアイサ
- 浜野チエ子 ヒシクイ、ホオジロガモ
- 早坂 泰夫 ヤブサメ、カヤクグリ
- 道川富美子 ケアシノスリ、チュウヒ
- 山田 甚一 ミソサザイ、コゲラ
- 吉中宏太郎 ミサゴ、ハヤブサ

以上18名 34点

【新しく会員になられた方々】

- 青山 和正 (札幌市中央区) 堺 典子 (札幌市厚別区)
- 穎川 洋志 (札幌市中央区) 田村 元春 (旭川市)
- 中村 隆 (札幌市南区) 中島 房子 (千歳市)
- 加藤 睦子 (札幌市北区) 高橋 貞夫 (江別市)

【北海道野鳥愛護会】 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465
HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>